

# シリア内戦の 4年間を振り返る

多くのシリア難民がヨーロッパに脱出しようとして地中海を渡る光景が世界に衝撃を与えました。シリアではこの夏までに死者が23万人を超え、400万人が国外に逃れ、国内難民が1700万人出ています。何がシリアで起こっているのか、7月に大阪でシリアの専門家である立命館大学の末近浩太教授に講演をしていただきました。そのまとめです。



末近浩太さん  
(立命館大学教授)

## 紛争はなぜ始まったのか

シリアは1946年にフランスの植民地から独立して、宗教に基づかない国作りをしました。1963年にクーデターによって政権をとったバアス党は社会主義を掲げる政党で、その政権を牛耳ってきたのがアサド大統領一族です。アサド一族は独裁体制をずっと敷いてきました。アサド政権は「アラブの統一」という物語と、「対イスラエル戦争」を掲げて、今は戦時中だからと独裁を正当化してきたわけです。2000年に先代のハーフイズ・アル＝アサド大統領が死んで、息子のバッシヤール・アル＝アサド大統領が後を継ぎました。共和制国家で元首が世襲することは普通ではなく、権力の集中、富の集中、汚職に対する国民の不満が出るのは当然のことでした。

市民が非暴力のデモで自由を獲得するための抗議行動が、エジプト、チュニジア、イエメン、リビア等で起こりました。いわゆる「アラブの春」です。シリアでも2011年3月に市民による「改革要求」が始まりました。最初、市民は政権を倒すという発想はなく、改革を求めたわけです。これに対してアサド大統領は内閣をつくりなおし、憲法改正などの改革に手を付ける一方で、非常に過激な弾圧を開始しました。軍の中でも政権への忠誠心の高い精鋭部隊が弾圧を忠実に行いました。政権の弾圧を受けた改革運動は、もうアサドを倒すしかないという革命運動へと変わっていったのです。

市民が武器を取ったことにより、暴力的手段が蔓延拡大し「軍事化」しました。「アラブの春」は市民によ

る平和的な民主化要求、抗議デモだったわけですが、武器を使うようになった時点で、そのシナリオからは外れてしまった。反体制派は「自由シリア軍」という民兵組織を作って対抗しアサドを倒すまで戦うんだ、となった。しかし一般市民は訓練も受けていないし命も惜しいし、そこまでの覚悟もない。その結果、命を懸けてでもアサドを倒したいという血気盛んな人たちの運動となった。市民による民主化運動はあつという間に終わり、2011年8月くらいには内戦になってしまったのです。

## 紛争はなぜ終わらないのか

アサド大統領の親族や側近が掌握した精鋭部隊にとっては、一般市民なんて全然敵ではない。だからシリア国軍を掌握している限り、アサドが倒れるわけがなかった。すぐに市民が負けて終わるはずだったのが、内戦が続いているのは、反体制側に外から武器が供与されるから、つまり「国際化」したからです。反体制派が武器を持って強くなり、アサド政権と互角にやりあえるようになると紛争が長期化し、戦局はこう着状態に陥りました。拮抗しているために紛争が長引いているのです。

武器や資金を渡し戦闘員も送り込んだ勢力は3つあります。第一はアメリカやEU、湾岸諸国という外国政府で、反体制派を押ししている。第二は在外シリア人の反体制派。湾岸諸国やトルコ、欧米などにおいて、いつかアサド政権を倒したいと思っている。第三に過激なジハード主義者がどんどん入ってきた。彼らの目的は

アサド政権と戦うことです。外から様々な過激な思想を持った人たちが、アサドを倒しにやってきた。目的はバラバラですが、みなアサドを倒したいという点では一致し、武器、資金、戦闘員がどんどんシリアに入り、反体制派は強くなって肥大化した。紛争が長期化し拡大していけば、破壊の度合いがどんどん大きくなってしまい、一般市民は身をひそめて、戦争が終わるのを待っているという状況です。

## 代理戦争

反体制派を湾岸諸国やトルコが支援し、アメリカやEUがその後ろにいて、アサド政権を追い詰めていった。一方でアサドを支援する国としてイランや、ロシアや中国が出てきた。一言でいえば「代理戦争」です。

サウジアラビアとイランは大変仲が悪い。中東地域で覇権争いをしている。シリアでアサド対反体制派の勝敗が決すると、それぞれの同盟国、同盟者が倒れることになってしまっただけで全体のバランスが崩れる。そのため代理戦争になる。国際的には、アメリカ・EUとロシア・中国はライバルの関係にあり、ロシアや中国にとってはアサドがいてくれた方がいい。こうなると戦争が終わらない。イランやサウジアラビアが合意しなければ停戦にならないし、アメリカ、ロシア、中国がうんと言わなければ国連安保理で決議も出せない。解決の落としどころを見つけるには、あまりにも多くの人と多くの国が関与しているから、4年間も内戦が長引いてしまったのです。代理戦争が激しくなり、シリアの国土が荒廃して行って被害が拡大し、そこで外からきたジハード主義者が漁夫の利を得て、力を持ちうる空間ができてしまった。それが「イスラム国」です。

9.11事件を起こしたアルカイダのイラク支部は、2003年の戦争によって荒廃し混乱したイラクに寄生するような形で力を伸ばしてきた。しかし2008、9年あたりにイラクの治安が改善されて、ようやく国家再建ができるという空気がでてきたころ、隣国のシリアが今度不安定になる。回復しつつあるイラクを出てシリアに向かったジハード主義者が、シリアの混乱の中で資金や武器を得て、戦闘員をリクルートするという形でどんどん強くなった。

そこに先ほど述べた国際化によって多くの武器や弾薬や人間が流れてくる。アメリカが武器を湾岸産油国に渡すと、知らぬ間にそれがシリアの反体制派諸組織に流れる。反体制派の諸組織は一枚岩ではなくて、あるグループが寝返ってイスラム国になったり、イスラ

ム国と一緒に戦っていたグループが朝起きたら反対派にいたり非常に錯綜している。一度シリアに入ってしまった武器はもはやどこに行くのかわからない。イスラム国は敵対するグループからも強奪してどんどん武器を増やしていった。武器があふれるようになったシリアでは、もはや武器のコントロールはできず、イスラム国のような過激派がどんどん強くなったのです。

## 「イスラム国」とアメリカの対テロ戦略

イスラム国は、とにかく「戦いたい」人たちで、イスラムのジハード（聖戦）を掲げ、「イスラムの信仰と共同体を守るために敵を殲滅する」と言うわけです。そして彼らが考えるイスラムに基づく国造りをする。「5年後にはマダガスカルやスペイン、インドも全部イスラム国になる」と言っています。大変に荒唐無稽ですが、勢力自体は拡大しつつあるので、危険なのは確かです。「イスラム世界は西洋に蹂躪されている。危機だ。戦わなくてはいけない」という呼びかけに答える人たちは世界中にいる。そういう人たちがイスラム国に参加してしまうわけです。

「アルカイダ」は破壊が大好きで、世界を転々としてアメリカとその同盟国に対してテロを繰り返してきた。イスラム国はシリアとイラクという実際にある土地を支配して国家を一方的に建設してしまった。アルカイダはどこにいるかわからない。しかしイスラム国にはツイッターやフェイスブックがあり、実際にイラクとシリアに存在するとわかっているから、かなりリアリティがあるわけです。

アラブの春によって始まったシリアの紛争は、イスラム国が登場することで三つ巴の戦いになりました。そうすると最初に倒す敵は誰なのか。これまでアサド政権だと言っていたアメリカが、最初に倒さなくてはいけぬのはイスラム国と言出し、アサド政権の地位は相対的に上昇して、「極悪」から「悪」位になっています。テロと戦っているんだ、とアメリカと歩調を合わせる形で延命・存続の可能性が出てきたわけです。

イランとサウジアラビアのライバル関係も、共通の敵としてイスラム国が出てくることにより、この1年くらいで少しよくなりつつあります。対テロ戦争の名の下で、米口中の共闘関係ができるかはわかりませんが、イスラム国が国際政治再編のきっかけになる可能性はあります。日本は「有志連合」を支持すると言っていますが、有志連合は第一の標的はイスラム国だと、2014年8月からイラクとシリアそれぞれで空爆を始



めた。しかしそれだけではイスラム国をやっつけることはできないので、アメリカ軍は3つの勢力をトレーニングして、イスラム国と対峙させようとしています。つまりイラク国軍を強くする。シリアの穏健な反体制派に武器や弾薬や訓練を提供する。それからクルド人の勢力支援です。

## どこへ向かうのか

米国の戦略が実は一貫していないのです。イラクではイラク中央政府と国軍を強化してイスラム国と対峙する。しかしシリアに対しては、アサドの中央政府ではなくて反体制派に武器や弾薬を与えている。対イラクと対シリアでは政策的なねじれがあるわけです。イスラム国の側は、シリアとイラクの国境なんて関係なく1つの国を作ろうと思っているので、この政策的なねじれが結果的にはイスラム国の勢力拡大を助長させてしまっている側面もあります。

イスラム国だけでなく、様々なジハード主義者のグループが出てきて周辺国へ拡散しています。もはやシリア内戦をどう治めるかのレベルではなくて、地域全体の秩序をどう保つのかという大きな問題になってしまった。しかも有効な手立てがほとんど見えない状態になっています。

2011年にはシリアが「民主化」するかもしれないと、未来の展望が開かれるような雰囲気がありました。しかし内戦になると、民主化なんてどうでもよくて、どちらが勝つのかという「軍事問題」に関心は移ってしまった。しかし誰も勝てない、皆が敗者になりシリアがどんどん荒廃していく中で、今度は「人道問題」だ

といわれるようになった。人の命や財産が失われていく中では、誰が勝つとか、民主化とかはもうどうでもよい。シリアの人たちをどう救えばいいのかと話題が変わった。しかし被害を抑えるには、国際問題化したシリアの絡まりを解く必要がある。シリアに介入しているいろいろな勢力が、一斉に手を引けばいいのか、逆に介入を強めて解決しなければいけないのか。国際社会が一致団結できないでいるうちにイスラム国のような人たちがどんどん強くなって、かつてはのどかだったシリアが世界で一番危険なところ、世界全体の安全保障にとって非常に危険な場所になってしまった。この4年間を振り返ってみると、争点がとにかく積み重なって、何も解決されずにすべてが起こったままです。シリアの今後がどこに向かうのか、全然展望を示せないのです。それくらい複雑な問題になってしまっています。

是非を論じることも大事ですが、現実を見てみると、アサドという「重し」には、シリアの自由を封殺した代わりに、シリアを安定させてきた機能があった。「アサド後」をどうするのかという青写真を作らないまま、アサドを取り去るのは非常に危険な行為です。過去半世紀にわたって、どういう国を造るのかははっきりしてこなかったシリアを、アサドが力でおさえてきた。そのシリアにいろいろな勢力が介入してぐちゃぐちゃにしてしまったのが、現在の状況だと思います。解決のためには、何がシリアにとって最適なものか歴史を振り返りながら少し冷静に考えていく必要があると、私自身は考えています。

7月14日、大阪ドーンセンター  
まとめ文責：パレスチナ子どものキャンペーン

## シリアで起こっていることは 21世紀最悪の人道危機

.....アンジェリーナ・ジョリー(女優)

UNHCRによると、難民は429万人(2015年11月3日現在)を超え、さらに国内避難民が760万人(10月7日)。シリアの総人口が2100万人程度なので、3人に1人は国内難民になっているというさまじい状況である。

国連人道支援室(OCHA)によると、シリア国内では、死者25万人以上、負傷者100万人以上。10月16日に「シリア人権監視団体」が出した数字によると、2011年3月18日以来の死者は25万124人。そのうち市民が11万5627人(子ども1万2517人、女性8062人)、外国人兵士3万7010人、アサド

政権軍兵士5万2077人。(この数字には、アサド政権の刑務所における被拘禁者2万人以上や、様々な勢力による襲撃・虐殺による何千人もの行方不明者は含まれていない。)

レバノンにいるシリア難民数は約150万人(登録120万人)である。シリアから再難民となって、レバノンに避難してきたパレスチナ難民は約10万人(国連UNRWAへの登録数は約5万人)で、多くの人たちが既存のパレスチナ難民キャンプとその周辺、非公式の難民キャンプ、シェルターなどに仮住まいをしている。

国連各機関は資金不足のために、支援の打ち切りや削減を進めている。またレバノン政府はシリアからの避難民の就労を認めないだけでなく滞在許可を更新せず、大多数が不法滞在者になっている。